

—IOT/IOE時代の知のあり方を巡って活発論議—第18期年次大会開催

—西垣氏「集合知と専門知の組み合わせが問題を解決に向かわせる」

—黒本氏「コマツはものづくり企業からサービスプロバイダーへ」

日本ナレッジ・マネジメント学会は3月21日、東京・神田の専修大学神田キャンパスにおいて、「新インターネット時代（クラウド、ビッグデータ、IoT/IOE）の望ましい集合知とは一人と機械の複合知の協創—」をテーマに第18期年次大会（大会実行委員長小沢一郎専修大学教授）を開催しました。基調講演に、日本でいち早く集合知の有意性を説いてきた東大名誉教授、東京経済大学教授の西垣通氏、特別講演に、建設機械のIOT化で世界をリードしているコマツ取締役兼常務執行役員の黒本和憲氏を迎え、午前9時半から午後5時まで、集中した議論を繰り広げました。この日の参加者は、事務局調べで100人を超え、会場となった専修大学の教室は、熱気に包まれました。

花堂理事長、小沢一郎大会実行委員長がそれぞれ開会の挨拶をし、続いてコマツの黒本和憲氏が特別講演を行ないました。黒本氏は、有名なCOMTRACKに象徴されるIOT戦略の基本を明らかにした上で、「コマツが単なるものづくり企業から、IOTを機に、グローバルなサービスプロバイダー、ソリューション提供企業へと変わっていくことになった。今後、DNAそのものも変わっていく」と大胆な将来図を描いて見せ、コマツが社内に蓄えた知の活用の重要性が益々大きくなると訴えました。

基調講演の西垣通氏は、集合知の基礎理論を解説の後、「答えのある問題では、一定の条件を満たせば集合知は有効だが、答えのない問題では必ずしも有効ではない。集合知と専門知を組み合わせるなどの工夫が、問題を解決へと向かわせる」と述べ、集合知論議の今後の新たな方向性を示して、会場の注目を集めました。

午後の部はAトラックとBトラックの2会場に分かれて開催されました。名城大学教授の大西幹弘氏が司会・コメンテーターを務めたAトラックでは、プライスウォーターハウスクーパースマーバルパートナーズ(株)山口博氏の「M&A・組織再編成の成否を握る社内SNS」など4報告の後、当学会専務理事、山崎秀夫氏の司会で、「新しいインターネット（クラウド、ビッグデータ、IoT/IOE）の展開」と題するパネルディスカッションが行われました。

一方Bトラックは、金沢工業大学教授の加藤鴻介氏の司会・コメンテーターにより、日本経済研究所西田陽介氏の「顧客の知と価値意識 -ものづくりのイノベーションを考える-」をはじめ4報告があり、最後に本学会の進博夫氏の司会により「組織変革実践研究ワークショップ」が開かれ、組織変革研究部会でファシリテーターを務めているエーザイ知創部高山千弘氏による、「ナレッジクリエーションのためのワークショップ」の一部がその場で公開、実演されました。

(第 18 期年次大会の詳細は次号でお伝えします)